

サタン儀礼としての集団的人間虐殺——急報

<http://stateofthenation.co/?p=193985>

SOTN

November 2, 2023

最初に、ある重要な背景を正しく理解しなければならない。それは聖書の預言と続いて起こるその実現という、ユダヤの独特の伝統についてである。

「神聖な聖典が、神聖とは逆の文書に豹変する (morphs)」

世界平和を求める修正主義者：——

人類の世俗的な行動は、しばしば、秘教的な聖典の預言（神からの言葉）や、曖昧なユダヤ歴の予言によって支配される。これら古い歴史をもつ預言と、それを支える予言の多くは、元々、古代の口承の伝統を通じて、今日まで伝わっている。それらが現れたときには、それは、巻物あるいは石板に書き記されている。このようにしてそれらは、ある危機的な瞬間に言葉となり、未来の世代の恐れ多い権力や、預言者の確かさとして強調された。最終的に、すべての意味ある預言は、書写の専門家によって記録され、その結果としてのほとんどの予言が、占星術者の場合と同じように、保存された。

次のように言い換えられた、古い言い伝えがある：——

宗教的権威者は常に、財政的/経済的権力を吹き鳴らし、それが次に政治的な影響力を吹き鳴らし、政治的権力と影響力は、次に必ず軍事力を吹き鳴らす。

これはよく知られていないことだが、ユダヤ-キリスト教-イスラム教という世界宗教を通じて、大きくなった一神教の伝統は、そのそれぞれが、終末の預言に関する独自のアジェンダを持っていた。数千年を通じて、「棒の先の人参預言」は、教徒の集まりを管理するための、非常に便利な道具になっていき、それは人口の全体を管理するものでもあった。都市が平野から起こって海岸線に延びていくにつれて、不道德と悪事が増えていった。支配階級はますます預言者や占星術者に対し、神の取りなしを求めるようになった。

このような理由から、いくつかの王国の預言アジェンダは、時間とともに、より自己奉仕的、より操作的になっていった。いくつかの歴史的な例では、それらはあからさまに搾取的に、弾圧的になっていった。いろんな種類の秘密結社が、この種の予言の影響、秘教的知識、また神秘的権力の、乱用と誤用に反対しながら成長していった。次第に、そこから生ずる社会の緊張が、常に存在する両極性へと発展していき、それが更に、この現在の「紛争の時代」の、数多く多様な紛争へと具体化していった。

ここでのキーポイントは、より種族的で支配的な宗教組織が、この常に両極的なコンテキストから生まれ、とうてい名誉にはならないやり方で、預言と予言の両方を利用したことである。ある場所や時代には、預言を実現させるために、それが現実に発せられ書かれた。

これらの例では、支配者陰謀団の選ばれた「預言者」が、預言をねつ造し、ある決まった日と特定の場所で、その顕現を実証することもできた。同様に、多くの宮廷占星術者が、似たやり方で、彼らの「権力」を使ったことが知られている。この極めて聖典的なやり方で、王や女王が、神や女神となり、聖職者や預言者が、神格化されていた。ユダヤの伝統が、この3つの主要な西洋宗教では最古のものだったので、それは「神聖な聖典が、神聖とは逆の文書に豹変する」機会が起こるための、最も長い時間を享受した。これが、このエッセーの核心部分である。ユダヤの聖典とヘブライ(ユダヤ)歴に組み込まれた、予言の力は、現在、否定しがたいものである。

ここで再び、明らかにされていることは、**預言書の著者たちは、彼らの未来の宗教的血脈を通じて、その預言の言葉が、正確に書かれた通りに起こるだろうと考えている、**ことである。預言書(と予言)が文字通り、前もって予定され、計画されているのだから、それらは予定された時と場所で、正しく執行することができる。このようにして**預言者と犯罪者たちは、数千年もかけた計画によって、人類を債務的な刑務所か、経済的農業労働に閉じ込める、パートナーになった。**

しかし、この完全に詐欺的な**野獣(beast)のシステム**が、今は維持することができなくなったので、シオニストのジャガーノートのすべての車輪は、リアルタイムで脱落している。そしてガザにおける、この見えないように操作された危機と、比類のない人道的破局は、その隠せない真実を反映している。それが次に説明されている：――

現在ガザに起きていることは、聖書的、黙示録的なものを 超えている



実に、パレスチナ人たちは、長く計画され、高度に組織された「サタン礼拝堂」による、サタン儀式の人間の生贄の犠牲者となっている。

しかし理解すべき最も重要なことは、あらゆる目撃者が、この完全に身の毛のよだつ現行の犠牲には、2つの観点があることである。

第一に、シオニスト・イスラエル国家は、故意に10月7日を選んで、この恐ろしいサタンのような集団的人間の生贄を始めたこと。これは、ユダヤの風習 Fall Feasts が、2023年10月6日に終了した翌日であった。それは、イスラエルのシオニスト犯罪者たちを、この忌まわしく邪悪な生贄を行う高僧に祭り上げるもので、必然的に彼らを、聖書歴史が始まって以来最大の権力からの、墜落を決定させるものだった。すでにイスラエルは、10月7日より前から、諸国家の世界共同体内部に、ごくわずかの友人しかいなかった現実が証明されている。そして今、もっと少数になった。結局のところ、どんな自尊心を持つ国家や人々が、このような野蛮な血に飢えた国家と、交際しようと思うだろうか？ 確かに米、英、EU、カナダ、オーストラリア、ニュージーのZOG（シオニスト支配政府）はそう思うだろう。しかし、今後それはなくなると予想される。

第二に、パレスチナ人たちは、この地球の文明全体に対し、シオニスト・イスラエル国家の底なしの悪と、サタンの性質を啓蒙するために、それと知らずに自分たちを犠牲にした。ここでのキーワードは「それと知らず」である。現在、彼らのシオニスト弾圧者の手で、毎日のように行われているパレスチナ人虐殺は、世界中で見られ、聞かれ、感じられてい

る。そしてこの犠牲は、サタンの大量生贄儀式を実行する、懲りない犯罪者どもに対する厳しい即刻の反響を、すぐにも受けるだろう。この古代の、人間を生贄にする儀式は、イスラエルの最初の種族にまで遡る。ただ彼らは、この汚い秘密を現代まで、ずっと隠していた。

パレスチナ人たちは、この極端に不幸な役割を演ずるように、運命によって選ばれたが、誰かがそれをやらなければならなかった。なぜなら、そのようにして初めて、イスラエルという犯罪国家が、10月7日以来やってきたように、自分自身の剥き出しの有様を、細かい事情に至るまで、さらすことができたからである。

今やっと、アパルトヘイト・イスラエル国民国家が、完全にその仮面を脱ぎ、ありのままの**野獣**を暴露するに及んで、あらゆる国家が、彼らを極端に危険な、ならず者国家として、どんな悪でも不正でも、堂々とやってのける鉄面皮の存在として、排斥しつつある。



シオニズムと野獣のしるし “666”

イスラエルの国旗が、6芒星をもつ「野獣のしるし」であることは、今日、悪魔の666の記号を知っている地球人なら、誰でも知っているであろう。

多くの修正主義歴史家や聖書研究家は、国際的シオニスト運動を、獣のしるし666の本当の出所と考えるところまで行っている。アメリカはシオニスト・ネオコンに徹底的に支配されており、ネオコンは、世界的な戦争商売の直接の責任者なので、誰でも霊的に、また比喩的・現実的に、彼らに同調する者は、誰でも、666の記章を着けている。なぜか？

いわゆる「ダビデの星」は、その全体に6という数字が書かれている。それは6つの点をもつ「6芒星」であるだけでなく、相互に交わる3三角形の2辺でできている。それはまた、6つのより小さい3三角形と、6つの角をその周囲にもっている。要するに、

イスラエルの国旗を表わす「ダビデの星」は、666 という数霊術とともに、非常に重要な幾何学形を表わしている。



.....

この6角形は、それ以来、イスラエルの国旗に取り入れられ、国際的シオニズムの最も認められたシンボルとなった。イスラエルの非常に戦闘的な、無法な振舞いのために、彼らの国旗はまた、彼らの戦争犯罪とアパルトヘイト体制、国家スポンサーによるテロリズム、それに制度としての法破りのシンボルになった。確かに、未来は、彼らの世界的な、野蛮で無法な行動を考えるなら、現代イスラエル国家にとって、やさしいものにはならないであろう。



[訳者 Greatchain 注]

これは続編があるが、これだけにしておく。今起こっている多難で深刻な問題について、これほど広く深い見解をもって論ずることができる論者は、SOTN 以外にはないと思われる。驚くべきことは、このサイトには、例えば現在のような突発的大事件が起こった場合、膨大な数の関連資料がただちに用意されることである。

ここで述べられることは、主流新聞や NHK ニュースに対する、アンチテーゼだと言ってよい。ということは、現在のような深刻な事件が起こった場合、我々国民に対して責任ある報道をするはずの人たちが、SOYN とは正反対のことを教えるというこ

とである。基本的に同じ立場で、見方やニュアンスの違う報道をするのならよい。そうでなく、最初から敵対の姿勢で報道するということである。したがってこれは、相互に道徳的な批判をすることになる。

ここで論者が言っていることは、神の立場を装いながら、実はずっと昔から神の敵であった者たち、我々を騙し続けてきた者たちが、いよいよ我々の面前で、本性を現しつつあるということである。これは、単なるニュースや報道が扱うことのできないものである。それは政治や経済でなく、人間の魂という領域に属するもので、魂が新聞を拒絶するか、それとも、魂などというものを考えたこともない人が、新聞に教育されるかの問題となる。さすがに、大量の子供を含めた大虐殺となれば、たいていの人には動揺するだろうが、「サイコパス」と言われる優秀だが欠陥のある人種には、何も起こらないのであろう。

ここに専門家として、歴史的・学術的に述べられていることは貴重だが、(能力のせいではなく)本能的に、聞く耳を持たない人々が、かなりいると思われる。しかし、そういう人でも、我々のこの世界に、何かわからない薄気味の悪さを、実感している人は多いだろう。ここで説明されていることは、その「薄気味の悪さ」の正体である。